

叙事詩の宗教哲学

—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXV)¹—

茂木 秀 淳 社会科学教育講座

キーワード：モークシャダルマ、ダルマ、カピラ、祭式の果報、クンダダラ、uñchavṛtti

[261 章](前稿からの続き) (D.270 章, 9674-9706, K.275 章)

スューマラシュミは言った。

- (36) (ヴェーダの記述に矛盾があるならば) どうしてヴェーダに権威はあるのか。どのして (祭式の) 棄却は果報を伴うのか。この二つは明らかに (相違する) 道である。尊者よ、それを私に語るべし。

カピラ仙は言った。

- (37) 汝ら正しき道に住する者たちは²、この世で目に見える果報を (pratyakṣam) 見る。しかし、汝らが尊崇する (upāsate) もの (祭式) では、この世でいかなる目に見えるもの (果報) があるのか。

スューマラシュミ仙は言った。

- (38) バラモンよ、私スューマラシュミは、(真理を) 知らんがためにここ (牛の体内) に入った³。私は、幸福を求めるがために、誠実に答えたのである。論争をしようとしてではない⁴。この恐ろしい疑問について、尊者は私に語るべし。

- (39) 正しい道に住する汝はこの世で目に見える果報を見る。汝が専念するもので、この世で最もよく目に見える果報は何か。私は、論議の聖典 (tarkaśāstra) によらず (anyatra)、伝承によって⁵ 正しく到達したのである。

- (40) 伝承とはヴェーダの文章であるが、しかしまた、論議の聖典も伝承である。正しく伝承を⁶ 尊崇するならば、伝承は果報を成就させる⁷。伝承による確定によって (āgamanīścayāt)、(果報の) 成就是、目に見えるものとして経験されるのである。(Cf. Hopkins[Great Epic] p.146 āgama の定義)

- (41) (行き先の異なる) 船に結ばれた船は、川の流れと結びついても、連れ去られるばかり (で目的地に行き着かない) ように、賢者よ、どのようにして、悪しき認識をもつ者を (kubuddhīn) 渡らしむることができようか。尊者は、それを語るべし。私は、(弟子として) 近づきます (upapanna)。どうかお教え下さい (cf. MBh. XII.261.61)。

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学— Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXIV)—』(信州大学教育学部研究紀要第 116 号 2005 年 12 月) に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿で用いる主なものは以下のとおりである。

- Hopkins[1899]: E.W.Hopkins, Lexicographical Notes from the Mahābhārata, JAOS vol.20, pp.18-30, 1899.
- Hopkins[1901]: E.W.Hopkins, Yoga-technique in the Great Epic, JAOS vol.22, pp.333-379, 1901.
- Bedekar [1960]: V.M.Bedekar, A Study of the Mokṣadharmā Text (Mahābhārata XII 263): The Cloud as a Divinity, Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute 41, pp.73-84, 1960.

²satpathe sthitāḥ Cs. satpathe sthitāḥ, tyāgapatham asatpatham paśyanta iva karmapathe sthitā ity arthaḥ /

³ihāgataḥ Cn.,Cs.: ihāgataḥ, gavi praviṣṭaḥ /

⁴na vivakṣayā Cn. vivakṣayā, svapakṣanirvāhecchayā / vahater idaṁ rūpam / na prātibhīthyenety arthaḥ / Cs. na viavakṣayā, vivādecchayā /

⁵p. āgamāc ca D.,K.: āgamārtham

⁶p. yathāgamam D.,K.: yathāśramam

⁷sidhyati Cp. sidhyati phalabhāg bhavati /

- (42) (この世界には)⁸棄却者はなく、満足する者なく、悲しみなき者もなく、病なき者もない。獲得せんとする者もなく⁹、執着なき者なく、行為を離れた者もないのである¹⁰。
- (43) あなたも喜び、そして悲しむこと我々と同様である。あなたにも、あらゆる生き物と同じ感官の対象がある。
- (44) このように四種の種姓の生活期のもろもろの行為の中で、人々が求めるのは一つのこと(すなわち幸福)と決まっている時(nirṇaye)、(幸福である)病なきこととはどんなことか¹¹。
- カピラ仙は言った。
- (45) いかなる聖典にせよ、聖典を実行すれば¹²、その時には¹³、あらゆる行為において(果報が生じる)。誰でも(聖典を)実行するならば、そこでは¹⁴、その人に病はない。
- (46) 知識に従う人は、あらゆる知識を清める¹⁵。どんな振舞いにせよ、知識から離れたならば、それは生き物を(prajāḥ)を滅するのである。
- (47) 汝ら知識ある者たちは常に¹⁶完全に、(ヴェーダの)伝承を離れている(?)¹⁷。(汝らの中で)ある者は(kaścid)、いずれの時か、「合一」(aikātmyam)という名のものに近づく。
- (48) 聖典を正しく知ることなく、議論を力とするある人々は、欲望と嫌悪に打ち負かされるために、自我意識に支配されることになる。
- (49) 諸々の聖典の本質を認識することなく、聖典の盗賊となった者たちは¹⁸、ヴェーダを盗み、行為なく¹⁹、思慮熟さず²⁰、吉祥ならず、
- (50) 欠点のみを²¹見て、徳性を求めようとしない。彼らタマスを身体として持つものにとって、暗さ(tamas)こそが守護者(parāyaṇa)である。
- (51) (このような)本性(prakṛti)に従い、本性に支配されるような人には、嫌悪、欲望、怒り、偽善、虚偽、有頂天(mada)といった本性より生じる性質が常に起こる。
- (52) 苦行者たちは、目覚めた意識によって(buddhyā)このように見て²²、最高の境地に到達せんと求め、(感官を)統御することに喜び、淨不淨を捨てるであろう。

スューマラシュミ仙は言った。

- (53) 私は²³、このすべてを、バラモンよ、聖典に基づいて(śāstratas)述べている。聖典の意味を知ることなしに、行為は行なわれないからである。

⁸Cp. atra kapila uvāceti kvacid dr̥śyate pāṭhadḥ / sa ca pramādalikhito jñeyah

⁹P. na nirvivitso D.,K.: nānirvidhitso Cn. nā puruṣaḥ, nirvidhitaḥ cikīrśāśūnyaḥ /

¹⁰nāvr̥tto nāpavṛtto 'sti kaścana Cn. āvr̥ttaḥ saṃgavimukhaḥ / Cs. vivitsā labdhum icchā, tadrahitaḥ na / nāvr̥tto, rāgādibhyo 'bhivṛttaḥ /

¹¹この詩節の後に、K. は以下の句を挿入している。

etad bravītu bhagavān upaṇanno 'smy adhīhi bhoḥ / (=P.41cd)

¹²ācarate Cp. ācarate, pratipādayati /

¹³P. atha D.,K.: arthyaṃ

¹⁴P.,D.: tatra tatra K. tasya tat tu

¹⁵P. pāvayate D. plāvayate K. prāpayati Ca. plāvayati / yathā mṛdādikam jalena plāvitaṃ jalākāraṃ bhūtvā dravībhāve kaṭhinatātyāgena vilīyate, mṛd iti na jñāyate, tadvat / Cn. plāvayate, saṃsāraṃ nāśayati / Cp. saṃsārasāgarād uttārayati /

¹⁶P.,K.: nityaṃ D. vyaktaṃ

¹⁷P. nirāgamāḥ D.,K.: nirāmayāḥ Ca. nirāgamāḥ, agṛhītāgamatattvārthāḥ / Cp. vaidikajñānaśūnyāḥ /

¹⁸śāstradasayavaḥ Cs. śāstradasavyavaḥ, śāstrārthāpahārakāḥ /

¹⁹nirārambhā Cn. nirārambhāḥ, śamādyārambhāśūnyāḥ / Cs. śravaṇādihīnāḥ

²⁰P. apakvamatayo 'śivāḥ D. daṃbhamohavaśānugāḥ K. apakvamanaso 'śivāḥ

²¹P. vaiguṇyam eva D.,K.: nairguṇyam eva

²²P. etad buddhyānupaśyantaḥ D. evaṃ dhyātvānupaśyantaḥ K. ye tad buddhvānupaśyantaḥ

²³P.,D.: mayā K. tvayā

- (54) 適切な振舞いは、すべて聖典に基づく (śāstra) と (天啓聖典に) 伝えられている。適切でないものは聖典に基づかない、というのがこの天啓聖典が伝えるところである。
- (55) 聖典なしにいかなる行為もない、と定まっている。ヴェーダの文章と異なるものは、聖典に基づくものではない、と (天啓聖典に) 伝えられている。
- (56) 目に見えるもの (のみを実在と) 考える²⁴多くの人々は、聖典から逸脱して、ものを見ているのである。他の、無知によって損なわれた英知をもち、知恵少なく、暗闇に覆われている人々は、この世でもあの世でも、聖典が欠陥とするもの (? śāstradoṣa) を見ることはない²⁵。
- (57) しかし、単独で解脱した²⁶、完全に為すべきことを為した者によってこそ、ピンダのみに依存して、あらゆる方向に²⁷遊行することが可能であり²⁸、「ヴェーダの文章に依存して、解脱はある」と言うことも可能である²⁹。
- (58) しかし、家族に依存しているものには、この行為は為し難い。布施、ヴェーダ学習、祭式、子孫の継続、正直、
- (59) もしこれらを行なったとしても、誰にも解脱は存在しないならば、行為者であることとその結果³⁰は残念なことである。この努力は、無意味となる故。
- (60) そうでなければ (anyathā 解脱に達しなければ?)、ヴェーダに背く行為は³¹無神論となるであろう。これ (解脱) が無限であることを³²、尊者よ、私はすぐに聞きたい。
- (61) 正しく³³私に語るべし、バラモンよ、私は (弟子として) 近くに座る (cf.261.41)。どうかお教え下さい。あなたによって示された解脱を、そのままに私は学びたい。

[262 章] (D.270 章、9707-9754, K.276 章)

カピラ仙は言った。

- (1) 諸々のヴェーダは世間の人々の規範であり、ヴェーダは背かれてはならない。二種のブラフマンが知られるべし。音声のブラフマン³⁴と最高のブラフマンである。音声のブラフマンに通じた者が、最高のブラフマンに至るのである。(Cf.MBh.XII.224.60; Mait Up. 6.22; Vākyapadīya 1.22)
- (2) ヴェーダ (の儀式) において身体を作るものが³⁵ (バラモンとしてふさわしい) 身体を作る。(ヴェーダのマントラによって) 浄化された身体をもつバラモンは (ブラフマンの知の) 器である。

²⁴P.,D.: vyakatamāninaḥ K. 'tyarthamāninaḥ Ca. vyaktamāninaḥ, vyakta evāyaṃ vedārtha iti bhrāntāḥ / Cn. vyaktam pratyakṣasiddham, tad eva manyante /

²⁵P.,K.: śāstradoṣaṇ na paśyanti iha (sandhi irregular) cāmura cāpare D. śāstradoṣaṇ na paśyanti śocanti ca yathāvyayam 従って、śāstradoṣa を見ない人々は、P.,K. では、d 句に apare があるので、ab 句の主語と異なるものとなり、D. では ab 句の主語と同一となる。 śāstradoṣa Deussen: von der Schrift gerügten Fehler

この後に、D.,K. と同次の詩節を挿入している。

indriyārthāś ca bhavatāṃ samānāḥ sarvajantuṣu / (=P.43cd)

evaṃ caturṇāṃ varṇānāṃ āśramāṇāṃ pravṛttiṣu / (=P.44ab)

ekam ālambamānānāṃ nirṇaye sarvatodiśam / (cf.P.44cd)

ānanyam vadamānena śaktenāvarjitātmanā /

²⁶P. ekena muktena D.,K.: ekena yuktena Ca. ekena dvaitādarśinā ātmaikaṇiṣṭhena yogārūḍhena /

²⁷P.,K.: sarvatodiśam D. vijitātmanā

²⁸K. はこのあとに次の句を挿入している。

nātyatam vadamānena śaktena vijitātmanā /

²⁹D.,K. はこの後に次の句を挿入している

apetanyāyāśāstreṇa sarvalokavigarhiṇā /

³⁰dhik kartāraṃ ca kāryam ca Ca. dhikkartāraṃ, etat kartāraṃ dhik /

³¹vedānāṃ prṣṭhataḥ kriyā Ca. prṣṭhataḥ kriyā, vedānāṃ aprāmāṇyam āpadyeta /

³²etasyānanyam Ca. ānanyam, śāśvataphalapradatvam / N. etasya karmakāṇḍasya ānanyam ānanyahetutvam / etasya は「解脱の」か、「家長の」か。

³³P. tathyam D.,K.: tattvam

³⁴śabdabrahma Ca. śabdabrahma, vedāḥ

³⁵yad vede kurute tanum Ca. vede kurute tanum, vedārtham śarīraṃupanayanadvārā brāhmaṇaśabdavācyaṃ kurute / Cn. garbhādhānavidhinā utpādayati / Cp. upanayanena vedādhyanayogyam śarīraṃ kurute / Cs. yad upanayanasaṃskāraṃ kurute tad dvitīyam janma /

- (3) 彼(バラモン)は行為によって無限と³⁶結びつくのである。その無限について汝に語るであろう。(無限とは)伝承なく、言い伝えなく³⁷、眼前にあり、世間を証人とするものである。
- (4) 「法である」として、欲望なく祭式を行なう人々は、得たものを捨て、貪りなく、慈悲と怒りとを離れている。よき人々に³⁸与えること、これが財産の道である。
- (5) (以前の)行為を源とする³⁹悪行に (cf.MBh.XII.262.24)決して依存することなく、意識の分別において完成し (manasamkalpasiddha)、清浄な知識によって心定まり、
- (6) 怒ることなく、嫉妬することなく、自我意識も利己性もなく、知識を基盤とし、三種の清浄をもち⁴⁰、あらゆる生き物の幸福に満足し (cf.MBh.XII.233.14)、
- (7) 家長としてよく自分の行為に専心した⁴¹人々がいた。そしてヨーガに専心する王族たち、規定に従って(生活する)バラモンたちが(いた)。
- (8) (彼らは生き物に対し)平等で、誠実さを備え、満足し、知識は定まり、明らかなダルマ(の果報)をもち⁴²、清浄で、信仰心篤く、高低(のブラフマン)を信仰していた。
- (9) 彼らはまず清浄であり⁴³、正しく誓約を行ない、困難や危険に遭遇しても、ダルマを行なったのである。
- (10) 集合してダルマを行なう者たちにとって、かつてはそれ(ダルマ)は安楽であった。彼らには、贖罪が規定される必要は全くなかった。
- (11) (彼らは)真実のダルマに住し、最も打ち勝ちがたい人々と考えられている。(彼らは)少しも執着することはなく⁴⁴、ダルマのごまかしは最後まで⁴⁵なかった。
- (12) 彼らは、第一の行為規範 (cf.Manu 11.30)をいっしょに行なった⁴⁶。この状態に住する者には贖罪は存在しなかった⁴⁷。贖罪は、力弱き自己をもつ者にふさわしい、と天啓聖典は伝えている⁴⁸。
- (13) かつてのこの種のバラモンたちは⁴⁹、祭式を運び⁵⁰、三種の学問に通じ、清浄であり、行儀作法にかなひ、栄光に満ち、毎日祭式によって祭り、願望も束縛も離れ、目覚めた者たちであった。
- (14) 彼らの祭式とヴェーダと行為は、伝承にかなっていた。そして伝承聖典は、時にかなひ、(彼らの)願望 (samkalpa) は、誓約にかなっていた⁵¹。
- (15) 欲望と怒りを去り⁵²、本性として (prakṛtyā) 確固とした自己を持ち、誠実にして、寂静を常とし、自分の行為に住する者にとって⁵³、一切は無限であった⁵⁴、と永遠の聖典は我々に伝えている。

³⁶P. ānāntyaṃ anuyunkte yaḥ karmaṇā D. ānāntyaṃ atra buddhyedaṃ karmaṇā K. ānāntyaṃ anucintyedaṃ karmaṇā Cn. karmaṇā phalam ānāntyaṃ mokṣopayogi cittaśuddhirūpam /

³⁷anāgamam anāthyaṃ Cp. iti hetu smṛtihetutvād aitiḥyam anumānam, tan na bhavati anāthyaṃ / Cv. nirāgamam, pravṛttikarmapratipādakāgame śraddhām vinā /

³⁸tīrtheṣu Ca. tīrtheṣu uparāgādiṣu / Cn. satpātreṣu /

³⁹P. karmayonitah D., K.: karmayoginah

⁴⁰trīśukrāś Cn. trīśuklāḥ, janma karma vidyā ceti trīṇi śuklāni yeṣām / Cs. yonividyākarmabhiḥ śuddhāḥ / Cv.(reading triyuktāḥ) tribhir vedair yuktāḥ /

⁴¹P. bhūyishṭham avyutkrāntāḥ svakarmasu D., K.: bhūyishṭhā apakrāntāḥ svakarmasu Cn., Cp.: avyutkrāntāḥ ādaravantaḥ /

⁴²pratyakṣadharmāḥ Cs. pratyakṣadharmāḥ, pratyakṣīkṛtadharmaphalāḥ /

⁴³purastā dbhāvitātmano Cp. purastāt, janmāntare / Cs. bhāvitātmanāḥ, paramātmadhyānaparāḥ /

⁴⁴na mātrām anurudhyante Ca., Cp.: mātrām indriyam / Cn. miyante viṣaya anayeti mātrā buddhiḥ / tāṃ nānurudhyante, api tu śāstram eva / Cs. mātrām, viṣayaparamparām / Cv. mātrām, rūparasādikam /

⁴⁵antataḥ Cs. antataḥ kāraṇakāle 'pi /

⁴⁶P., D.: tam eva abhyācaran saha K. tam evātra caran mahān D. はこの後に以下の句を挿入している。

teṣāṃ nāsīd vidhātavyaṃ prāyaścittaṃ kadācana / (cf.P.10cd, D.11cd)

⁴⁷P., K.: asyāṃ sthitau sthitānām hi D. tasmin vihausthitānām hi

⁴⁸P., D.: durbalātmāna utpannam prāyaścittam iti śrutiḥ K. yadā tu durbalātmānaḥ prāyaścittam tadā bhavet

⁴⁹P. yata evaṃvidhā viprāḥ D. evaṃ bahuvidhā viprāḥ K. eta evaṃvihāḥ prāhuḥ

⁵⁰yajñāvahanāḥ Ca., Cp.: yajñāvahanāḥ, yajñanirvāhakāḥ Cs. tasmin nahuṣayajñe samāsīnāḥ

⁵¹P., K.: yathavratam D. yathākramam

⁵²D., K. はこの後に以下の句を挿入している。

duścarācārakarmaṇām / (D., K.: 17c=P.16b)

svakarmabhiḥ śamsitānām (D., K.: 18a=P.16c)

⁵³P. sthitānām sveṣu karmasu D., K.: sveṣu karmasu vartatām

⁵⁴ānāntyaṃ evāsīd Ca. ānāntyaṃ, anantāya hitam ānāntyaṃ / Cp. ānāntyaṃ anantaphalam /

- (16) 損なわれない善をもち (adīnasattva)、為すに難しい行為をなし、自分の行為によって守護された者たちの⁵⁵苦行は、(輪廻を引き起こす) 畏怖すべきものとなった⁵⁶。
- (17) そのすばらしい、古代からの、永遠の、変化しない⁵⁷善行を、もろもろのダルマの中に示された何らかの (善行を)、行うことのできない人々によって⁵⁸ (畏怖すべきものになった?)。
- (18) (かつて) よき行為は、放逸なく何者にも屈することなく⁵⁹、困窮時の法はなく⁶⁰、あらゆる種姓において、いかなる逸脱もなかった。
- (19) 四本の足をもつ単一のダルマに依存する、かのすぐれた善き人々は⁶¹、それ (ダルマ) に規定に従って到達した後、最高の境地に赴いた。
- (20) ある人々は、家から離れて森に住んだ。それとは別の人々は、家に留まって、梵行者となった。
- (21) バラモンたちは、この四本の足をもつダルマを生活期として知った⁶²。無限はブラフマンの状態である。バラモンという名は (それによって) 決まったのである。
- (22) それゆえ、このように、かつてダルマを行なう者であった⁶³これらの⁶⁴再生族たちは、光となって天空に見られるのである。
- (23) (彼らは)、(本来の) 星辰と同様に、天空において⁶⁵ /、多くの星の集団となった (cf. Hopkins [Great Epic] p.380 His saints are stars, but again only “like stars”, and finally “not stars.”)。「(彼らは) 満足のゆえに、無限に達した」とヴェーダは伝えている。
- (24) もしもこのような彼らが、再び母胎へと輪廻に戻ったとしても、彼らは、決して (以前の) 行為を源とする悪行によって (262.5) 汚されることはない。
- (25) かくして (無限に) 結びついた者が (真の) バラモンとなり、他の者は贗のバラモン⁶⁶となろう。行為こそが⁶⁷人の清浄さ、あるいは不浄さを言うのである。
- (26) このように、無限 (への到達) によって、そしてヴェーダ (による認識) によって、執着が消えた者にとっては「一切は無限であった」と、このように⁶⁸永遠なる天啓聖典は我々に伝えている。

⁵⁵P. svakarmabhiḥ saṃvṛtānām D. svakarmabhiḥ saṃbhṛtānām K. svakarmabhiḥ śaṃsitānām

⁵⁶tapo ghoratvam āgamam Cp. tatkarṇakhyam tapaḥ saṃsārajanakatvena ghoratvam āgamam / Deussen: wurde eine furchtbare Askese geübt

⁵⁷tam sadācāram āścaryam purāṇam śāśvatam dhruvam Cp. tam prasiddham sadācāram trirācamanasnānādirūpam / purāṇam śāśvatam dhruvam brahmaiva kūṭhastham āśrayed iti bhāvaḥ /

⁵⁸P., K.: aśaknuvadbhiḥ caritum kiṃcid dharmeṣu sūcitam D. aśaknuvadbhiḥ caritum kiṃcid dharmeṣu sūkṣmatām Hopkins は、kiṃcid dharmeṣu sūtritām と読んで、この箇所は “must refer to the general class of legal Sūtras” と解している (Hopkins [Great Epic] p.16)。また aśaknuvadbhiḥ を受ける動詞のはっきりしない。

⁵⁹aparābhavaḥ Cs. aparābhavaḥ dharmāntareṇāparibhūtaḥ /

⁶⁰nīpaddharma Cp. ayam eva dharmo nirāpat, anyas tu sakāmo dharma āpat /

⁶¹P. dharmam ekaṃ catuṣpādām āśritās te naraśabhāḥ D. vyastam ekaṃ caturdhā hi brāhmaṇā āśramaṃ viduḥ 「唯一なる生活期は、分割されて四種になった、バラモンたちは言う」(中村 [1998] p.451) この読みならば、第 17 詩節の aśaknuvadbhiḥ は、ここの「分割された」につなげることが可能である。K. dharmam ekaṃ catuṣpādām āśritās te narā vibho

⁶²第 21, 22 詩節の伝承には混乱がある。三本の異同は次のようである

dharmam etam catuṣpādām āśramaṃ brāhmaṇā viduḥ / (P.21ab, D., K.: not found)

vyastam ekaṃ caturdhā tu brāhmaṇā āśramaṃ viduḥ / (P. not found, K.24cd, D.22cd)

ānantaṃ brahmaṇaḥ sthānaṃ brāhmaṇā nāma nīśayaḥ / (P.21cd, D., K.: not found)

sarve sarvatra tiṣṭhanto gacchanti paramam gatim / (K.25ab, P., D.: not found)

ata evaṃvidhā viprah purāṇā dharmacāriṇaḥ / (P.22ab, D. not found)

eta evaṃvidhāḥ prāhuḥ purāṇā brahmacāriṇaḥ / (K.25cd, D. not found)

ta ete divi drīsyante jyotiṣbhūtā dvijātayaḥ / (P.22cd=D.24cd=K.26ab)

D. の欠損は、P.22b の dharmacāriṇaḥ を P.20d の brahmacāriṇaḥ と錯覚して、P.21ab-22ab に相当する部分をとばしてしまったためか。

⁶³dharmacāriṇaḥ Cp. (reading brahmacāriṇaḥ) brahmacāriṇaḥ, māṃsamatithunatyāgaparāḥ /

⁶⁴ete Cs. ete, nārāḍapramukhāḥ /

⁶⁵dhiṣṇyeṣu Cp. dhiṣṇyeṣu, vimāneṣu

⁶⁶brāhmaṇako Cp. brāhmaṇako brāhmaṇādhamāḥ / nindāyām kaḥ pratyayaḥ /

⁶⁷P., K.: karmaiva D. karmaivam

⁶⁸P. evāśid evam D. āśid vai evam K. evāśid iti

- (27) 渴愛を離れ、清められ (nirṁikta)、清浄な自己をもつ者に対しては、第四の⁶⁹ウパニシャッドのダルマが (四生活期に?) 共通なものとして伝承聖典に伝えられている⁷⁰。(Cf.MBh.XII.236.15, Aramaki[1989] p.107)
- (28) そのダルマは、常に制御した自己をもち、成就したバラモンたちによって、完成される⁷¹。それは、満足を根本に持ち、棄却を本性とし、知識の基盤であると言われる。
- (29) (第四のダルマは) 解脱 (apavarga cf.Hopkins [1901] p.343) を目標とし、永遠にして普遍の苦行者 (yati) のダルマである。(それは) 共同でも、単独でも、能力に応じて行なわれるべきである。
- (30) それぞれが解脱に向かいながらも⁷²、力弱き者は、ここで疲弊する。清浄な者は、ブラフマンの⁷³足跡を求めつつ、輪廻から解脱するであろう。

スューマラシュミ仙は言った。

- (31) 享受する者、布施する者、祭式を行う者、ヴェーダを学ぶ者、ダルマによって獲得した財産によって⁷⁴棄却を行なう者、
- (32) これらの者が死んだ時、誰が最もすぐれた天界の獲得者か⁷⁵。尋ねる私に対し、このことをありのままに語るべし、バラモンよ。

カピラ仙は言った。

- (33) (彼らの) あらゆる行為は⁷⁶すぐれている。そして、徳性という点で高まった者も⁷⁷(すぐれている)。しかし彼らは、棄却の安楽に達しない。汝もこのように見なしていよう。

スューマラシュミ仙は言った。

- (34) 汝にとっては、知識が基盤であり、家長たちには行為が定まっている。そして、あらゆる生活期の基盤は (niṣṭhāyām) 同一であると言われる。
- (35) (基盤が?) 同一でも異なっている、(生活期には) 他に相違はない、と言われている⁷⁸。尊者は、それを正しく、適切に、私に語るべし。

カピラ仙は言った。

- (36) もろもろの行為は身体の完成であり⁷⁹、知識は最高の境地である (cf.Hopkins [Great Epic] p.139 fn.1)。おう吐によって (? vamanai(h) 執着が滅し、味の (?) 認識がない時に⁸⁰、(cf. Śāṅkara Vedāntasūtrabhāṣya 3.4.26)
- (37) 慈悲、寛容、静穏、非暴力、真実、誠実善意 (adroha)、謙遜⁸¹、羞恥⁸²、忍耐、そして平静 (が生じる)。

⁶⁹caturtha(h) Cp. caturthaḥ caturthāśramasādhyaḥ /

⁷⁰P.,K.: caturtha aupaniṣado dharmāḥ sādharmaṇaḥ smṛtaḥ / D. caturthopaniṣaddharmāḥ sādharmaṇa itī smṛtiḥ /

⁷¹P. sa siddhaiḥ sādhyate D. saṁsiddhaiḥ sādhyate K. saṁsiddhaiḥ sevyate

⁷²P. gacchato gacchataḥ kṣemaṁ D. gacchatām gacchatām kṣemaṁ K. gacchante balinaḥ kṣemaṁ

⁷³P.,D.: brahmaṇaḥ K. brāhmaṇaḥ

⁷⁴P. mātṛābhīr dharmalabdhabhīr D. mātṛābhīr upalabdhabhīr K. mātṛābhīr dharmalubdhābhīr

⁷⁵svargajittamaḥ Cp. tattvajñānaparipāka evātra svargaḥ, svargaḥ sattvagunodayaḥ itī bhagavadvacanāt /

⁷⁶parigrahāḥ Cs. parigrahāḥ karmāṇi /

⁷⁷P.,K.: guṇato 'bhyudayaś D. guṇatām abhyupāgatāḥ Cs. sattvādiguṇebhyo 'bhyudayaḥ phalaṁ yeṣāṁ te guṇato 'bhyudayaḥ ?

⁷⁸P.,K.: nāya ucyate D. nātra dṛśyate

⁷⁹śarīrapaktiḥ karmāṇi Ca. śarīrapaktikarmāṇīti, śarīrādhiṣṭhānasya cittasya vātasleṣmādināṁ dhātusaṁjñānāṁ nāḍīnirodhakānāṁ paktiḥ pākāḥ nirdoṣatā, tadarthāni karmāṇi /

⁸⁰P. pakve kaṣāye vamanai rasajñāne na tiṣṭhati / D. kaṣāye karmabhiḥ pakve rasajñāne ca tiṣṭhati / K. pakve kaṣāyavijñānaṁ yathā jñāne ca tiṣṭhati / Ca. rasajñāne na tiṣṭhati, rāgādhiṣṭhānāne na tiṣṭhati, madhyastho bhavātīty arthaḥ / Cn. rasaḥ prītiḥ brahmānandaḥ / Cs. yathā rasajñāne, raso vai saḥ, itī śuddhakaivalye tiṣṭhati /

⁸¹P. nābhimānaś ca D.,K.: 'nābhimānaś ca

⁸²hrīś Cs. hrīḥ, akāryān manaso nivṛttiḥ /

- (38) これらがバラモンの道であり、これらによって最高のものに達する。これを智者は、行為の決定であると⁸³心によって知るべし⁸⁴。
- (39) 完全に静穏で、清浄で、知識の定まった賢者が満足して赴く行き先が、最高の目標と言われている。
- (40) もろもろのヴェーダと知るべきことをあるがままに知ったならば、そのような者をヴェーダを知る者と言う。それ以外のものは、ほら吹きである⁸⁵。
- (41) ヴェーダを知る者は、一切を知る者である。一切はヴェーダに基礎づけられている。存在するものと存在しないものの⁸⁶一切の基盤 (niṣṭhā) は、ヴェーダにある。
- (42) これこそが、存在するもの、しないもの一切の⁸⁷基盤である。智者にとっては、終わりも中間も、有も無もそのようである (ヴェーダに基盤をもつ)。
- (43) 「一切の棄却」というこのことによって、「寂滅」ということが基礎づけられている⁸⁸。「満足」というこの語において、解脱における清浄さが⁸⁹確立しているのである。
- (44) 天則⁹⁰、真実、知識、知るべき対象、一切のアートマン、動くもの動かぬもの⁹¹、あらゆる安楽、吉祥にして顕現しない最高のブラフマン、(その) 生成消滅、
- (45) 光輝、寛容、寂静、病なきこと、清浄、そして (tathāvidham)、永遠不変の天空、これらの言葉を通して、理知の目 (buddhinetra) を持つ者たちによって捉えられるブラフマンと、ブラフマンを知る者 (バラモン) とに敬礼。

[263 章] (D.271 章、9755-9810, K.277 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) ヴェーダはダルマ、利益、愛欲を称賛している、バーラタ族よ。この中で、どれを獲得するのがすぐれているのか、それを私に語るべし、祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (2) ここで汝に古譚を語ろう。かつてクンダダール (kuṇḍadhāra cf. Hopkins [1899] p.26) が愛情から帰信者を助けた古譚を⁹²。
- (3) ある貧しいバラモンが、果報を欲して (kāmat) ダルマを求めた⁹³。そのため彼は、祭式のために財産を求めて、厳しい苦行を行なった。
- (4) そこで、彼は、意を決して、神々を礼拝した。しかし誠信によって (bhaktyā) 神々を礼拝しても、彼は財産を得なかった。

⁸³karmaniścayam Cs. karmaniścayam, karmanām antaḥkaraṇaśūddhidvāreṇa jñānāhetutvaniścayam /

⁸⁴anubudhyeta manasā karmaniścayam あるいは、「心による行為の決定であると認識すべし」か。(中村 [1998] p.453 「行為の [果報] の確定を心によるものと知るべし」)

⁸⁵P. vātareṭakāḥ D., K.: vātarecakāḥ Ca. vātareṭakāḥ vātavaśāt pralāpinaḥ / Cn. vātarecakāḥ, bhastrāparanāmā carmakōśaḥ / vātaveṭaka itī gauḍāḥ paṭhanti, vyācakṣate ca vātavaśāt veṭakāḥ bhāṣakāḥ / veṭ paribhāṣaṇe itī dhātuḥ / Cpp. atonye vātaveṭakāḥ itī bahuvacanāntam api kvacid dr̥ṣyate / Cs. vātarecakāḥ, vedapāṭhakāḥ /

⁸⁶yad yad asti ca nāsti ca Cs. astīti vartamānasya nirdeśo, nāstīti bhūtabhaviṣyatoḥ /

⁸⁷P. sarvasya D., K.: sarvatra sarvatra の読みは、cd 句の asat を考慮したためか。

⁸⁸P. samastatyāga ity evam śama ity eva niṣṭhitāḥ D. samāptaṁ tyāga ity eva sarvavedeṣu niṣṭhitāḥ K. samāptaṁ tyāga ity eva śama ity eva niścītam

⁸⁹P. samtoṣa ity atra śubham D., K.: samtoṣa ity anugatam

⁹⁰ṛtaṁ Cs. ṛtaśabdaḥ parokṣavastuvacanāḥ /

⁹¹P. jaṇagamaṁ sthāvaraṁ ca D., K.: sthāvaraṁ jagamaṁ ca

⁹²Bedekar [1960] は、263 章全体を概説的に紹介し、インド古典において雲が神として登場することの特異性を論じ、古代ギリシャの類話やアメリカインディアンのホピ族の説話と比較し、これらの類似性を指摘している。

⁹³P., D.: kāmād dharmam avaiṣṣata K. kāmād dhanam avaiṣṣata Cn. kāmād dharmam avaiṣṣata, phalakāmanayā dharmam kariṣyāmi cintitavān /

- (5) そこで次のように考えた。「まだ人々に心を奪われていない⁹⁴私にすぐに恩寵を与えることのできる神は誰なのか」。
- (6) するとその時、(かのバラモンは) 近くに、美しい姿をして⁹⁵、神々の従者、雲のクンダダーラがいるのを⁹⁶見た。
- (7) その偉大な自己を持つ者を⁹⁷見て、彼への誠信が生じた。「この方が、私に幸福をもたらすであろう。この方は、そのような美しい姿をしている。」
- (8) (彼は) 神に近いのに、他の人間どもによって囲まれていない。「この方が、私に財産を与えるであろう。沢山、そしてすばやく。」
- (9) そこで、そのバラモンは、香煙によって、香によって、大小の花輪によって、そして種々の供物によって、彼を礼拝した。
- (10) すると、雲はすぐに⁹⁸満足して、彼 (のバラモン) を助けることを約束する次の言葉を語った。
- (11) 『バラモン殺し、スラー酒を飲む者、盗賊、そして誓約を破った者に対しては、贖い (niṣkṛti) が善き人々によって規定されているが、忘恩の徒には、贖いは存在しない。(Cf. MBh. XII.166.24, Rāmāyaṇa 4.34.12, Pañcatantra (ed by M.R.Kale) 4.11)
- (12) アダルマは願望の息子 (tanaya) である。怒りは、嫉妬の息子 (suta) であると伝えられている。食欲は不正直の息子 (putra) である。忘恩の徒は子孫 (をもつ) に値しない』と。
- (13) それから、かのバラモンは、クシャ草の上で眠りつつ、クンダダーラの威光によって、夢の中であらゆる生き物を見た。
- (14) 静謐さによって、苦行によって、誠信によって (これまでの) 自分を否定し⁹⁹、清浄な自己をもつバラモンは、夜に夢を (nidarśnam) 見た。
- (15) 彼は、偉大な輝きをもち、偉大な自己をもつマニバドラが神々の中にいて、説明しているのを¹⁰⁰見たのである、ユディシュティラよ。
- (16) そこにおいて神々は、清浄な行為が行われた場合には、国土 (rājya 王位) と財産とを与え、不浄な (行為が行なわれた) 場合には、(国土と財産とを) 奪い去るのである。
- (17) その時、夜叉が見ている中で、大威厳のクンダダーラは、飛び出して¹⁰¹、神々の (いる) 地にひれ伏した、バーラタ族の雄牛よ。
- (18) すると、偉大な光輝をもつ¹⁰²マニバドラは、地に伏した者に、「クンダダーラよ、何が望みか¹⁰³」と神の言葉を語った。

クンダダーラは言った。

⁹⁴ mānuṣair ajaḍikṛtaṃ Cp. mānuṣair anavarataprārthanayāna jaḍikṛtaṃ varadānena māndyaṃ na prāpitam / Cs. jaḍikṛtaṃ, muhurmuḥur abhyarthya mānāṇi kṛtavaiṃśasyam /

⁹⁵ P. atha saumyena vapuṣā D., K.: so 'tha saumyena manasā

⁹⁶ jaladharaṃ kuṇḍadhāraṃ avasthitam Ca. kuṇḍadhāraṃ meghaśarīram / kuṇḍadhāraṃ, kuṇḍāni jalādharapātrāṇi kāṣāyavastrāṇi vā dhārayantam /

⁹⁷ P. mahātmānaṃ D., K.: mahābāhuṃ

⁹⁸ P. tataḥ svalpena kālena D., K.: tatas tv alpena kālena

⁹⁹ nirupaskṛtaḥ Ganguli: standing aloof from all (carnal) enjoyment (p.273) Deussen: von Glücksgütern entblösste (p.467) N. nirupaskṛto bhogavartijitaḥ / 中村 [1998] は Nīlakaṇṭha 注に言及し、これに従っている。(p.456) Apte は of self-denying temperament の訳語をあげ、この詩節を例文としている。

¹⁰⁰ vyādiśantaṃ Cn. vyādiśantaṃ, devebhyah phalayācakan nivedayantaṃ /

¹⁰¹ P., D.: niṣpatya K. nipatya

¹⁰² P. mahāyāsāḥ D., K.: mahāmanāḥ

¹⁰³ P., D.: kim iṣyate K. kim icchasi

- (19) もし、神々が私に満足していらっしゃるならば、ここに私を信仰しているバラモンがおります。この者に、何か安楽が増大する恩恵が与えられることを私は望みます。

ビーシュマは言った。

- (20) するとマニバドラは再び、神々の指示に従って、かの大威厳のクンダダーラに語った。
- (21) 立つべし、立つべし。汝に幸いあれ。願いは聞き入れられた、汝に安楽あるべし¹⁰⁴。汝の友であるこのバラモンが財産を望む限り、私は、神々の指示に従い、限りなく与えるであろう。
- (22) しかしクンダダーラは人の本性は動き、変化するものと考えて、尊敬すべき (yaśasvin) バラモンの考え (mati) を苦行に対して向け (ることを考え) た。

クンダダーラは言った。

- (23) 私は、バラモンのために財産を求めるつもりはありません、財産を与える方よ。誠信ある者に対して別の恩恵が施されることを願います。
- (24) 財宝に満ちた大地や、あるいは大きな財産の山を、誠信ある者に対して、私は望まない。この者はダルマをもつ者であるべし。
- (25) この者の心 (buddhi) はダルマに喜ぶべし。ダルマのみを助けとして生きるべし。ダルマを主たるものとするべし。これが私の考える恩恵です。

マニバドラは言った。

- (26) 国土や種々の快樂がダルマの果報であるならば¹⁰⁵、この者は、体の汚れを除いて、(このダルマの) もろもろの果報を得るべし。

ビーシュマは言った。

- (27) すると、偉大な栄光をもつクンダダーラは、ダルマを (与えるように) 繰り返した。そこで、神々は彼に満足した。

マニバドラは¹⁰⁶ 言った。

- (28) 神々はすべて汝に満足した。そしてこの再生族にも同様に (満足した)。この者はダルマを本性とする者となろう。(彼の) 心 (mati) はダルマに向けられよう。

ビーシュマは言った。

- (29) そこで、願いのかなった雲 (クンダダーラ) は喜んだ、ユディシュティラよ。心から得ることを望んだ (īpsitaṃ manaso)、他の者たちによっては得るのが難しい恩寵を得て。
- (30) その後 (夢から醒めて)、再生族のすぐれた者は、脇に置かれている繊細な衣に近づいて¹⁰⁷、(衣を) 見た。そして (彼に) 嫌悪が生じた¹⁰⁸。

バラモンは言った。

- (31) この者 (クンダダーラ) は、(私の) 善行を知らない。他の誰が、(私の善き) 行為を知るであろうか。ダルマに従って生きるためにはむしろ森に行ったほうがよい¹⁰⁹。

¹⁰⁴ D., K. はこの後に次の句を挿入している。

dhanārthi yadi vipro 'yaṃ dhanam asmai pradīyātām /

¹⁰⁵ P. yadā D., K. sadā

¹⁰⁶ P., D.: mañibhadra K. māñibhadra

¹⁰⁷ P. pārśvato 'bhyāgato D., K.: pārśvato 'bhyāśato

¹⁰⁸ nirvedam āgataḥ Bedekar [1960] and he was seized by a mood of disappointment.

¹⁰⁹ P., D.: varaṃ dharmeṇa jīvitum K. paraṃ dharmeṇa jīvitum

ビーシュマは言った。

- (32) 嫌悪によって、そして神々の恩寵によって、かのすぐれた再生族は、森に入って、そこで大変厳しい (sumahat) 苦行を始めた。
- (33) 再生族は、神々と客の残したものによって (生き)、果実、木の根を食べものとした。彼には、ダルマにおいても、大王よ、歓喜が生じた¹¹⁰。
- (34) 木の根と果実をすべて捨てて、再生族は、木の葉を食べものとするようになった。(その後) 木の葉を捨てて、再生族のすぐれた者は¹¹¹、水を食べものとするようになった。
- (35) その後多くの年が経った後、彼は、風を食べものとした。しかし (ca) 彼の命 (prāṇa) は衰えなかった。それは奇跡のごとく (adbhutam iva) であった。
- (36) ダルマを信仰し、恐ろしい苦行を行なう彼に、長い時がたつと、天眼 (神の眼 divyā dr̥ṣṭi) が生じた。
- (37) 彼には「もし私が誰かに¹¹²満足し、(その者に) 大きな財産を与えようと言え¹¹³、私の言葉は偽りにならないであろう」という意識¹¹⁴が生じた。
- (38) そして、喜びを顔に浮かべ、再び苦行を始めた。さらに彼は、成就した者 (siddha) として、最高者に達した¹¹⁵、と思念した。
- (39) 『誰であれ私が満足した者に国土を与え (たいと思う) ならば、彼はすぐに王となるであろう。私の言葉は偽りとはならないであろう。』
- (40) クンダダーラは、バラモンの苦行の結果によって¹¹⁶(心配となって)、そして、好意によって駆り立てられて、バラモンの目の前に姿を現わした、バーラタ族よ。
- (41) 彼は彼 (バラモン) と出会って、そこで規定通りに礼拝した。バラモンは、クンダダーラに驚いた、王よ。
- (42) それからクンダダーラは言った。「汝の眼は神聖にして最高である。その眼によって、王たちの行き先を見るべし、賢者よ。そしてもろもろの世界を見るべし¹¹⁷」と。
- (43) すると、そのバラモンは、超能力を備えた (divyayukta) 眼で、その時幾千の王たちが地獄に沈んでいるのを、遠くから見たのである。

クンダダーラは言った。

- (44) 心から私を礼拝して後、もし汝が苦しみを得るようなことがあれば、私は汝に何を為したことになる。また汝のための恩恵とは何であろうか。
- (45) 見よ。汝さらによく見るべし。人はどうして、もろもろの欲望 (の実現) を望むことができようか。なぜならば天界の門は、特にこの人々に対しては、閉じられているだから。

ビーシュマは言った

¹¹⁰P. ratir asyābhyajāyata D., K.: dṛdhā buddhir ajāyata

¹¹¹P. dvijasattamaḥ D., K.: dvijas tadā

¹¹²P. kasmaicid evāhaṃ D., K.: kasyacid eveha

¹¹³P. dadyādā mahad dhanam D., K.: dadyām ahaṃ dhanam

¹¹⁴buddhi 中村 [1998] 自覚 p.459 Duessen: es wurde ihm klar.

¹¹⁵P. yat paraṃ so 'bhyapadayata D., K.: yat paraṃ so 'bhimanyate D., K. が d 句を現在形にしているのは、c 句の acintayat の目的語として明確にするためか。

¹¹⁶tapoyogāt Ganguli: by the ascetic success which the Brahmana had achieved Deussen: kraft der Askese des Brahmane

¹¹⁷P. lokāṃś cāvekṣa cakṣuṣā D., K.: lokāṃś caiva tu cakṣuṣā

- (46) それから、彼は、人間が、欲望、怒り、食欲、恐れ、放逸、睡眠、疲労、そして怠惰を繰り返しつつ (āvṛtya)、暮らしているのを見た。

クンダダーラは言った。

- (47) これらのために、人々には (天界の門は) 閉じられている。神々は人間を恐れ¹¹⁸、人々は、(人々を恐れる) 神々の (不承認の?) 言葉から¹¹⁹いつも (天界に入ることのできない) 障害を作り出しているである。
- (48) 神々に承認されることなく、ダルマにかなった人となることは誰にもできない。(神々に承認された) 汝は、苦行によって国土も財産も与えることができるのである。

ビーシュマは言った。

- (49) それから、バラモンは水の保持者 (雲) に頭を下げた。そして、彼に、ダルマを本性とするバラモンは言った。『私に大きな恩恵が与えられました。』
- (50) 私はかつて愛欲と食欲に縛られていたために、あなたの愛 (sneha) を知ることなく、あなたに不満をもったことについて、私を許してください。』
- (51) クンダダーラは、「私は許す」と再生族の雄牛に言って、両手で抱きしめ、そして姿を消した。
- (52) それから、そのバラモンは、クンダダーラの恩恵によって、ただちに (purā) 苦行を身にそなえて¹²⁰この世界のすべてを廻ったということだ。。
- (53) 空に行くこと、そして望むものを得ること、それは、ダルマによる、そしてヨーガによる力によって (達成されるからである)。そしてかの最高の目標も (達成されるのである)。
- (54) 神々、バラモン、善人、夜叉、天上の楽人たちは (mānuṣacāraṇāḥ Deussen: himmlische Sānger, Ganguli: Charanas)、この世で (iha) ダルマにかなう人を敬うのであって、富多き人も愛欲に耽る人も敬うことはない。
- (55) 汝の心 (mati) がダルマに喜ぶ故に (yat)、神々は汝に対してたいへん恵み深いのである。富には安楽の部分がいくらかあるにすぎないが、ダルマには最高の安楽がある。

[264 章] (D.272 章、9811-9830, K.278 章)

ユディシュティラは言った。

- (1) 多くの祭式と苦行が同一の目的をもっている。祖父よ、なぜ祭式は、快楽と利益のためではなくて、ダルマのために行われるのか¹²¹。

ビーシュマは言った。

- (2) ここで汝に、ナーラダ仙によって語られた、落ち穂拾いによって生活するバラモンの、祭式を目的としたかつての振舞いについて語ろう。

¹¹⁸devānām mānuṣād bhayam Bedekar は「人間からの神々の恐れ」について、次のようなコメントをしている。

There is a veiled, ironical, and poignant criticism of the common psychology of religions sorshippers who, swayed by passions and desires to gain worldly ends, pester their respective gods with endless and frantic appeals and prayers for wealth, kingdom and pleasures of the senses. Even the gods become sick, surfeited and tired with these prayers, and are som much 'afraid of men' that they afflict them with worse passions and doom them to hell. (Bedekar [1960] p.79)

¹¹⁹devavacanāt Ganguli: at the command of the gods (p.275) Deussen: nach dem Ausspruch der Götter 中村 [1998]: 神々の命令によって

¹²⁰p. tapasā yojitaḥ purā D., K.: tapasā siddham āgataḥ

¹²¹kathaṁ yajñāḥ samādhitaḥ Cs. kathaṁ samāhitaḥ, kimprakārayā manovṛtyānuṣṭhitaḥ / Cp. yajñārthaṁ, viṣṇau samarpaṇārthaṁ / yadvā yajñārthe, vidhipālanadvārā sattvaśuddhyartham /

- (3) すぐれたダルマをもち、卓越した国であるヴィダルバ国に、一人の再生族がいた。その聖仙は、落ち穂拾いによって生活していたが、ヴィシュヌ神のための (?) 祭式に専心していた¹²²。
- (4) そこでの食事、シュヤマカ、スールヤパトニー¹²³、スヴァルチャラー、そして苦くてまずい野菜は、苦行 (の熱力) によって、甘味となった。
- (5) あらゆる生き物の不殺生によって、森の中で大地を得て¹²⁴、木の根と木の実を用いてさえも、(果報として) 天界に生じる (svargya) 祭式を行ったのである、敵を倒す者よ。
- (6) 彼の妻は、誓約によって痩せた (?vratakṛṣā)、清浄なプシュカラチャーリニーであった¹²⁵。祭主の妻として連れて来られ¹²⁶、(妻としての) 誠実さの故に、夫サティヤに従っていた¹²⁷。彼女はしかし、(夫の) 呪いを恐れたので、(祭式を好まぬ) 本性に従うことはなかった¹²⁸。
- (7) 彼女には、孔雀の抜けた羽の¹²⁹そして木の (?)¹³⁰衣が、望んではないのに作られた¹³¹。祭式におけるホートリ祭官 (の命令) に従って¹³²。
- (8) シュクラ神の再生は¹³³、嫉妬のためにダルマを知らないインドラ神は再生し¹³⁴、鹿となって、その森の中で近くにいて、(バラモンと) 一緒に過ごした。その鹿は (人の) 言葉を用いて (バラモンの) サティアに話した¹³⁵。「汝は悪しき行為をなしている。
- (9) もし祭詞と (祭式の) 要素が欠けたならば、この祭式は不完全となるでしょう。私を、祭火の中に (?hotre) 投げいれなさい。汝は、容易に¹³⁶天界に行くでしょう。」
- (10) すると、祭式にサーヴィトリ神が姿を現わし、彼に (鹿を祭火に投げ入れることを) 勧めた¹³⁷。すると勧める者に、答えが帰ってきた。「一緒に住んでいるものを殺すことはできない。」
- (11) このように言われて¹³⁸、(勧めるのを) 止めた彼女は祭式の火に入った¹³⁹。祭式が悪しく行われるとどうなるのか、ラサータラ (地下の世界) を見ようと願って¹⁴⁰。(この章未完)

¹²²yajñe yajñam samādadhe Ca. yajñe, viṣṇau / Cp yajñe, viṣṇau / yadvā yajñanimittam / Cn. samādadhe, samāhito 'vahito 'bhavat /

¹²³P. sūryapatnī, D., K.: sūryaparṇī Cp., Cs.: sūryapatnī suvarcaleti śākaviśeṣau / Cp. mājūrī sūryapatnī ca virasā madhurā tatheti madhumādhavī /

¹²⁴P., K.: upagamyā vane prthivīm D. upagamyā vane śuddhīm Cp. prthivīm upagamyā, bhāratavarṣe labdhajanmety arthaḥ /

¹²⁵P. puṣkaracārīṇī D. puṣkaradhārīṇī K. puṣkaramālīṇī Ca. puṣkaracārīṇī, puṣkaravan nirlepatvena caraṇacyutiḥ / Cp. puṣkaracārīṇī, samjñā / yadvā puṣkaratīrthacaraṇaśīlā /

¹²⁶P. yajñapatnītvam ānītā D., K.: yajñapatnī samanītā

¹²⁷satyenānuvidhiyate Cn. satye, satyasamjñe bhartari / nānuvidhiyate, ahiṃsāyajñam aśreyastvena manyamānā anuvīdhānam ānukūlyam na karoti / Cp. taddharme tasyā rucir nāstīty arthaḥ /

¹²⁸P. na svabhāvanuvartinī D., K.: tat svabhāvanuvartinī

¹²⁹mayūrājīrṇaparnānām Cn. mayūrapicchaiḥ samniveśaviśeṣeṇa gumphitais tasyā vastram varṇitam / Cp. mayūrāt pariṇāmena galitapakṣānām, parṇinām vṛkṣādīnām ca / Cs. mayūram, mayūravṛttam kṛtrimam ity arthaḥ / yathā mayūrasya prthakpatrāṇi parasparam sambhūyibhūya tiṣṭhanti tadvat tasyāḥ parṇa vastram ity arthaḥ /

¹³⁰P. parṇinām D., K.: varṇitam

¹³¹P. akāmāyāḥ kṛtam tatra D., K.: akāmāyā kṛtas tatra P. では kṛtam は vastram と結びつき、D., K. では kṛtas は yajño と関係する。

¹³²hotrānumārgataḥ Ca., Cp.: hotrānumārgataḥ, hotrasyānuṣṭhānānusārataḥ / (Cp.: akāmāyā kṛtā tatra yajñe / hotrānumārgataḥ iti pāṭhas tv anārṣaḥ /)

¹³³P., K.: śukrasya punarājātir D. śukrasya punarājñābhīḥ Cp. kvacid aparādhe 'padhyānād adharmavit Cs. punarājātīḥ, punarāvṛtya janāyukto dharmo 'bhavat /

¹³⁴P. śukrasya punarājātir apadhyānād adharmavit D. śukrasya punarājñābhīḥ parṇādo nāma dharmavit / K. śukrasya punarājātir avadhyānād adharmavat Cs. punarājātīḥ, punarāvṛtya janāyukto dharmo 'bhavat /

¹³⁵vacanabhir abravīt Ca. vacobhir iti bahuvacanam, vāram vāramanena bahudhoktam niścayāyeti sūcanāya / Cs. vacobhiḥ mānuṣyavāgbhiḥ /

¹³⁶P., K. atandritaḥ D. aninditaḥ

¹³⁷samnyamantrayat Cp. samnyamantrayat, evam kurvaty anumatiḥ dattavati / Cs. yajñe tenaiva mṛgeṇa yajane samnyamantrayat /

¹³⁸P., D.: evam uktā K. evam uktvā

¹³⁹P., D. praviṣṭā yajñapāvākam K. pravṛtta yajñapāvākāt

¹⁴⁰kiṃ nu duścariṣam yajñe didṛkṣuḥ sā rasātalam Cn. kiṃ nu iti samīpavartimūḍhajanotprekṣānirdeṣaḥ / rasātalam didṛkṣuḥ sā yajñapāvākam praviṣṭeti sambandhaḥ /